

ぶんかざい おおた

令和7年(2025)10月 発行

大田区教育委員会 大田図書館 編集
文化財担当

〒143-0025

東京都大田区南馬込五丁目11番13号

(大田区立郷土博物館内)

TEL 03-3777-1281 FAX 03-3777-1283

目次

- ◆特集 慰霊碑から見た戦後80年..... 1
- ◆修理・調査報告 安養寺三尊像..... 5
- ◆出土した防空壕・焼夷弾部品と久が原の空襲..... 6
- ◇令和6年度事業報告 8

第28号

特集 いれいひ 慰霊碑から見た戦後80年



①大田区戦没者慰霊塔（池上1-1-1 本門寺）

仁王門を通った右手に建つ。第二次世界大戦の戦死者及び戦災犠牲者のため、大田区戦没者慰霊塔建設奉賛会によって建立。塔内には、日清・日露戦争も含めた区内の犠牲者名を謹記した芳名録が奉安されている。

令和7(2025)年は、昭和20(1945)年に第二次世界大戦の終戦を迎えてから80年という節目の年になります。大田区域(旧大森区・蒲田区)においても、戦時下には軍需工場が密集していたことから広い範囲に空襲があり、多くの犠牲者を出しました。また、出征先で戦死した方もかなりの数に上りました。

戦争の悲惨な記憶を忘れないために、区内の各地には戦災慰霊碑が建立され、現在でも毎年供養が行われているところもあります。今号では、これら第二次世界大戦関連の慰霊碑について特集し、戦後80年を振り返ります。

大田区の第二次世界大戦関連慰霊碑一覧

写真番号及び名称	所在地	建立年	概要
①大田区戦没者慰霊塔	池上本門寺 (池上1-1-1)	昭和37 (1962) 年 4月8日	第二次世界大戦の戦死者及び戦災犠牲者のため、大田区戦没者慰霊塔建設奉賛会によって建立
②殉難五君之碑 じゅんなんごくんのみ	円乗院 (南馬込5-15-5)	昭和21 (1946) 年 5月25日	昭和20年5月24日の空襲時、勤務する軍需会社の寮を死守し、更に近隣の人々が避難するのを助けて犠牲となった5名の人物を弔って、寮の責任者が建立
③三界萬霊 さんがいばんれい		昭和43 (1968) 年 9月	戦争の犠牲になった人を含むあらゆる霊を供養し、また現世の平和と繁栄を祈って奉安
④復興観音 ふっこうかんのん	観音通り商店街 (中央3-16-9)	昭和23 (1948) 年 ※同33 (1958) 年 再建	戦死者、戦災犠牲者を追善供養するため、町内に観音会を結成し、昭和23年に観音像と仏堂を建立
⑤入新井萬霊地藏尊 いりあらいばんれいじざうそん	入新井公園 (大森北1-20)	昭和32 (1957) 年5月 ※同51 (1976) 年 5月29日再建	空襲で犠牲となった多くの人のために、入新井公園が建設される際、住民の有志により建立
⑥平和観音	平和島1-1-1	昭和35 (1960) 年 7月19日	この地には第二次世界大戦中は捕虜収容所、戦後は戦犯収容所があったことから、永遠の平和を祈って長沼孝三が制作
⑦殉国之碑 じゅんこくのみ	羽田神社 (本羽田3-9-12)	昭和36 (1961) 年 5月3日	明治以降の戦争の犠牲者を慰霊するため、羽田地区慰霊碑建設協賛会、羽田地区町会連合会によって建立
⑧殉国慰霊碑	春日神社 (中央1-14-1)	昭和41 (1966) 年 6月17日	第二次世界大戦において新井宿地区より出征して命を落とした人々を弔うため、地元の名士によって建立
⑨池上平和観音	曹禅寺 (池上7-22-10)	昭和43 (1968) 年 10月10日	昭和20年4月の空襲により犠牲となった周辺住民の冥福を祈ると共に、平和を願い、曹禅寺第1世住職・実道大憲によって建立
⑩慰霊碑	糀谷天祖神社 (西糀谷4-7-18)	昭和49 (1974) 年 3月	日中戦争及び第二次世界大戦の際に出征して亡くなった人々のため、慰霊碑建設協賛会を設立し、この碑を建立
⑪第二次世界大戦 道塚殉難者尊霊之碑 みちづか	大楽寺 (新蒲田3-4-12)	昭和49 (1974) 年 4月	第二次世界大戦の犠牲となった、道塚（現在の新蒲田付近）の人々を慰霊するため、寄進をもとに慰霊碑を建立
⑫戦歿精霊塔 しょうりょうとう		昭和52 (1977) 年 8月14日	第二次世界大戦の戦災犠牲者の三十三回忌となる年に、道塚自治会と大楽寺によって建立
⑬戦歿英霊供養之塔	東陽院 (仲六郷4-6-2)	昭和56 (1981) 年	第二次世界大戦において、出征して亡くなった檀徒を慰霊するため、東陽院第17世住職と檀家が中心となり建立
⑭五十間鼻無縁仏堂 ごじゅっけんばな	多摩川河口 (羽田6-11)	年代不詳	関東大震災や第二次世界大戦などで多摩川河口に漂着した水難者を祀る

大田区の戦災慰霊碑について

大田区教育委員会では、これまで昭和 56（1981）年に刊行した『大田区の近代文化財』（『大田区の文化財』第 17 集）の中で、戦災慰霊碑について集録しています。ただし、この時は西南戦争や日清・日露戦争、第一次世界大戦など、明治～大正期に勃発した戦争が対象で、第二次世界大戦関連の慰霊碑は含まれていませんでした。その理由ははっきりしませんが、当時はまだ戦争の記憶が残る方も多く、「文化財」とするには歴史が浅かったためかもしれません。

それから 40 有余年を経た現在、世代の移り変わりとともに「文化財」の範疇も広がり、戦後の遺産についても評価が進んできました。そこで、改めて第二次世界大戦関連の慰霊碑を取り上げることで、次の世代へ歴史を語り継ぐ手助けにしていきたいと考えます。

今回確認したかぎりでは、15 基の慰霊碑が現存していました。うち 1 基は日清・日露戦争に際しての忠魂碑台座に銘板を埋め込んだものであるため掲載を省略し、単独の碑として建立された他の 14 基をご紹介します。（田島）



②殉難五君之碑（円乗院）



③三界萬霊（円乗院）



④復興観音（新井宿）



⑤萬霊地藏尊（入新井）



⑥平和観音（平和島）



⑦殉国之碑（羽田神社）



⑧殉国碑（春日神社）



⑨池上平和観音（曹禅寺）



⑩慰霊碑（糺谷天祖神社）



⑪第二次世界大戦道塚殉難者尊霊之碑（大楽寺）



⑫戦歿精霊塔（大楽寺）



⑬戦歿英霊供養之塔（東陽院）



⑭五十間鼻無縁仏堂（羽田）

修理・調査報告 安養寺三尊像（西六郷 2-33-10、東京都指定文化財） 《木造薬師如来坐像》《木造阿弥陀如来坐像》《木造釈迦如来坐像》



写真1 修理完了後の三尊像

令和6年度をもって、安養寺（西六郷 2-33-10）所蔵の東京都指定文化財《木造薬師如来坐像（中央）》《木造阿弥陀如来坐像（左）》《木造釈迦如来坐像（右）》の9年間に渡る修理が完了しました（写真1）。長い年月の中で、形ある文化財は劣化や思いがけぬ損傷を完全に避けることはできません。多くの自治体で文化財保護のサポートが行われており、本事業も東京都文化財保存事業および大田区文化財保存事業として補助金が交付されました。

安養寺の三尊像は平安時代後期に制作された割矧ぎ造り（＝1本の材木を複数に分ける造り方）^{こしき}、古色塗りの仏像です。本尊である薬師如来坐像の像高は157.0cmで、台座や光背も含めると3mにも届き、大変迫力ある姿です。

本事業は、専門家である山本勉氏（大田区文化財保護審議会委員）の指導のもと、所蔵者の意向を踏まえて進めました。修理前には、文化財の状態を把握するために重要な保存状況調査が行われます。修理工房への搬出には、振動が伝わりにくく、温度・湿度を一定に保ったまま輸送が可能である美術品輸送専門車両を使います。三尊は薬師堂の2階に安置されているため、壊れやすい箇所を養生し、専門スタッフが支えながらリフトを使用して地上まで下ろしました（写真2）。



写真2 リフトでの運搬（釈迦像）



写真3 修理検討会

今回の修理では本体、光背、台座を全て一度解体し、虫食い跡や隙間への人工木材の充填、失われた部位のうち構造上必要な部位の制作などが行われました。事業開始後、昭和年代の修理によって本体への負荷がかえって強まっていることが判明したため、過去の補修を除去して本体の構造補強も行いました。

修理中も年に1回以上、所蔵者や専門家を交えて今後の進め方を話し合う修理検討会が実施されます。長期間の修理となるため、修理の進捗や所蔵者の意向を確認するにあたり欠かせない場です（写真3）。

下の修理前後写真（写真4）を見て、前後の表記が逆ではないか、と思う方もいらっしゃるかもしれません。しかし、この姿は現代の文化財保護の考え方を大変分かりやすく表しています。文化財修理での第一の目的は新品のようにすることではなく、現状を保ち、劣化させないよう後世に伝えることです。また修理後も元の状態に戻せるようにしておくこと、つまり可逆性も重要視されています。本事業でも虫食いに充填した人工木材や台座の構造補強などは、取り除ける素材、構造が用いられています。

今回修理したような仏像は、信仰対象として人の手によって大切に受け継がれてきたものです。現在の姿からは、何百年と積み重ねてきた長い歴史を感じ取ることができるのではないのでしょうか。

次号の『ぶんかざいおおた』29号では、より詳細に安養寺の三尊像についてお届けする予定です。（稲葉）



写真4 阿弥陀如来坐像
左：修理後、右：修理前

ぼうくうごう しやういだん
出土した防空壕・焼夷弾部品と久が原の空襲

令和6年11月、南久が原一丁目7番地内の千鳥久保貝塚（遺跡番号85）内で縄文時代の貝塚を発掘調査したところ、その下から防空壕が出土しました（図1）。確認できた室部（部屋部分）だけでも南北約3m、東西約2.5m、高さ約1mを測り、さらに北側に続いている様子も認められました。入口までの通路も設けられており、これまで区内で確認された防空壕の中でも規模の大きいものです。『久が原の昭和史』（以下、文献1）には「隣組みんなが入れる防空壕を作ることになり、（中略）深さ5メートル、長さ20メートル、一坪（3.3平方メートル）ほどの部屋が三つもある堅牢なものを、男はもちろん女子供まで総動員して掘り上げた」と記されており、今回の防空壕もそれに迫る規模であった可能性があります。内部は戦後にごみ捨て場として利用されたようで、コンクリート片以外の遺物は出土しませんでした。

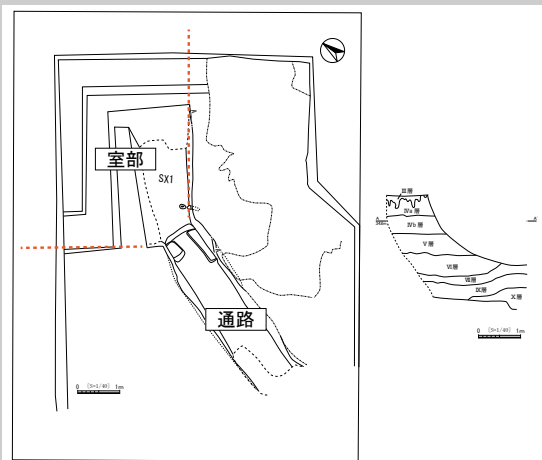


図1 千鳥久保貝塚内出土 防空壕 平・断面図

しかし、室部と通路の間から焼夷弾の尾翼部分と炸薬室の部品が出土しました。これは区内初の例です。尾翼内部は空洞で、付近から他の部品は見つからなかったため、安全であることを確認したうえで取り上げ作業を実施しました。尾翼は縦28cm、横43cm、高さ43cm、炸薬室の部品は径約35cmで、当時米軍が使用していた一般的な焼夷弾と同程度の大きさと考えられます。潰れて変形していることから、使用済みのものであり、久が原地域が実際に焼夷弾の攻撃を受けていたことがわかります。文献1および文献3には空襲の様子が多く記録されています。その一例をご紹介します。「当初、久が原は直接攻撃を受けることがなく、空爆帰りの飛行機が残りの焼夷弾を落として行く程度でした。しかし昭和十九年に入ると、我が家の周辺でも焼け出される家がめっきり増えました。我が家にも庭に被弾したものを含め十数発の焼夷弾が落ちましたが、幸い焼失は免れました。隣と裏の家は全焼してしまいました。」（文献3）



写真1 千鳥久保貝塚内出土 焼夷弾尾翼部（左）及び炸薬室部品（右）

同年10月には、久ヶ原遺跡（遺跡番号81）内の久が原六丁目17番地で工事立会調査を行った際、小規模ながら別の防空壕も確認されました。横幅約60cm、高さ約1mの通路の一部しか残っていませんでしたが、きれいなアーチ状の天井が残存していました（写真2）。

このほか文化財担当では過去15年間に、久ヶ原遺跡内での建設工事立会調査において、久が原四丁目43番地、六丁目16番地、六丁目23番地の3か所でも防空壕を確認しています。多くは工事中の不時発見で詳細な記録は残っていませんが、戦時中、久が原地域で多数の防



写真2 久が原六丁目17番地出土 防空壕 調査の様子

空壕が築かれていたことがうかがえます。

また、久が原には防空壕以外の軍事関連施設もありました。久が原三丁目 31・32 番地には高射砲台とその営舎・陣地が置かれ、久が原一丁目の都立雪谷高校付近には弾薬庫が設置されていました（図 2）。昭和 50 年代までは高射砲台座が 1 基残っていましたが（文献 2・写真 3）、現在はすべて撤去され痕跡を確認することはできません。文献 1 には「久が原商店街の北側に高射砲部隊があり、最初は激しく応戦するが、間もなく静かになってしまう。砲身が焼けて打てなくなるらしい」とあり、実際に B 29 爆撃機に向けて攻撃していたことが記されています。

久が原地域でこれだけ多くの防空壕が確認されている背景には、こうした軍事施設の存在があったのかもしれません。文献 3 には次のような記録もあります。「（昭和 20 年）5 月に蒲田地区が大空襲を受けた時、その際、久が原の高射砲陣地を目標にかなりの焼夷弾が落とされ、自宅の防空壕の中で、外から入ってくる煙に咳き込みながら朝まで敵機が去るのをじっと待ったことを思い出します。」

昭和 20 年 4～5 月には、大森・蒲田・川崎地域の京浜工業地帯を目標とした空襲があり、久が原でも B 29 爆撃機が墜落しました。具体的な記録が文献 3 にあります。「五月二十六日（土）（中略）偵察機一機が久が原に落下したのである。（中略）主翼の端の一部が、わが家の玄関の所にも落ちていた。」在地の考古学者・菊池義次は、戦後の昭和 22 年（1947）、自己所有地内にて墜落機の残骸を片付けようとした際に弥生時代の竪穴住居跡を発見しました（文献 4）。久が原一帯は弥生時代後期の集落跡である久ヶ原遺跡が広がっていることで知られますが、当時の発掘調査写真には、地表に瓦礫が散乱する様子も記録されています（写真 4）。

戦後 80 年を迎え、全国では戦争関連遺跡の調査や保存への関心が高まっています。令和 6 年 8 月には文化庁から「近世・近代遺跡の埋蔵文化財保護について（報告）」が発表され、地域に根ざした近世（幕藩体制成立から幕末・明治維新まで）・近代（幕末・開国頃から第二次世界大戦終結まで）の遺跡について、適切な調査と報告が必要であると述べられています。

今後も久が原地域やその周辺を発掘する際には、同様の戦争関連遺跡・遺物が出土する可能性があります。とくに焼夷弾部品は各地の平和記念館や歴史博物館で貴重な資料として展示されており、大田区の歴史を語り継ぐためにも、しっかりと記録・報告していきたいと考えています。

※南久が原で出土した防空壕と焼夷弾については、令和 9 年 3 月刊行予定の『千鳥久保貝塚発掘調査報告書』にて詳細を報告する予定です。（楠）



図 2 久が原三丁目付近軍事施設位置図（文献 3）



写真 3 久が原三丁目 高射砲台座（昭和 50 年代時点）（文献 2）



写真 4 菊池義次所有地内調査の様子（文献 4）

文献 1 久が原の昭和史編集委員会編 2013『久が原の昭和史』久が原地区自治会連合会

文献 2 社会教育課文化財係編 1981「高射砲陣地跡（砲台座）」『大田区の近代文化財』大田区の文化財第 17 集 大田区教育委員会

文献 3 久原小学校・昭和二十年卒業生同会「戦争体験」文集編集委員会 1997『太平洋戦争と久が原の子供たち』

文献 4 大田区教育委員会 1966「久ヶ原弥生時代遺跡調査研究小史 5 第 4 期」『久ヶ原弥生時代遺跡（遺蹟編）』大田区の文化財第 3 集

* 文献 1・3 は区民の聞き取りや執筆の記録です。個人情報保護の観点から、具体的な記録者名の記載は控えさせていただきます。

また、「」内の記述は原文ママ記載させて頂きました。

事業報告

令和6年度 文化財講演会

「考古学からみる大田区こうしんとうの庚申塔」

大田区内には、現在でも多くの庚申塔が残り、以前は庚申講も盛んに行われていました。また近年都内では近世・近代遺跡の発掘調査が相次いでいることから、令和6年12月21日（土）に庚申塔についてはじめて「考古学」の視点から講演会を実施しました。講師には石神裕之氏（京都芸術大学芸術学部教授）をお招きし、庚申塔・庚申講についてわかりやすく解説頂きました。（楠）



文化財講演会の様子

令和6年度 文化財公開見学会

「宝幢院の阿弥陀如来立像」

令和6年10月29日（土）、30日（日）に宝幢院（西六郷2-52-1）で、令和5年度に修理を実施した同寺本尊「阿弥陀如来立像（大田区指定文化財）」の見学会を開催しました。当日はお寺のご厚意により、都指定文化財「宝幢院文書」の一部も特別公開されました。（田島）



公開見学会の様子

令和6年度 文化財写真パネル展

文化財担当では、毎年、大田区立郷土博物館において、前年度の事業内容を写真パネルなどで詳しく紹介する展示を行っています。昨年度は令和6年10月8日から令和7年1月10日まで、3階特集展示ケースにて「特集 川端龍子邸と龍子記念館の魅力」「修理・調査報告 宝幢院阿弥陀如来立像」「田園調布本町26番遺跡 全国初の形状!? 中世の地下式坑出土!」「宝来公園内横穴墓 横穴墓追加発見!! 地中レーダー探査の成果」の4テーマについて展示しました。（『ぶんかざいおおた第27号』内容掲載）

今年度は令和7年10月7日（火）～令和8年1月12日（月・祝）の間、同会場にて開催予定です。ぜひご来館ください。（楠）



展示の様子

東京都指定「名勝」洗足池公園

開園60周年記念パネル展

「洗足池公園いまむかしの今昔」

公立の公園として開園してから60周年を迎えた洗足池公園。令和7年4月には、西側に新たなエリアもオープンしました。これらを記念して、3月20日に記念イベントが開催され、あわせて文化財担当と郷土博物館の学芸員による合同企画として、洗足池公園の歴史や文化、その魅力を紹介するパネル展を実施しました。



展示の様子